



Title	与謝野晶子『新訳源氏物語』の成立：その本文生成に依拠したテキストは何であったかを中心にして
Author(s)	宮本, 正章
Citation	詞林. 2010, 48, p. 48-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67621
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

与謝野晶子『新訳源氏物語』の成立

——その本文生成に依拠したテキストは何であったかを中心にして——

宮本 正章

はじめに

与謝野晶子は生涯三回にわたって『源氏物語』の現代語訳を試みている。その一は『新訳源氏物語』で、明治四十四年（一九一〇）一月に稿を起し、大正二年（一九一三）十月に完成した¹。全三巻四冊として金尾文淵堂より、明治四十五年（一九二二）二月から大正二年十一月にかけて刊行された。本稿はこれを考察の対象とする。

その二は『新訳源氏物語』全六巻で、昭和十三年（一九三八）十月から昭和十四年（一九三九）九月にかけて、前者と同じ金尾文淵堂から出版された。現在、全訳『源氏物語』与謝野晶子訳（角川文庫）として、人々に親しまれている。

その三は「幻の源氏物語講義」とよばれる大正十二年（一九二三）九月の関東大震災でその訳注の原稿すべてが焼失してしまったものである。大阪の実業家小林天眠³から『源氏物語』の現代語訳の依頼が明治四十二年（一九〇九）九月頃であり、天眠が出した執筆期間百ヵ月の条件で始められたが、

出版予定の大正七年（一九一八）を過ぎても原稿は半分ぐら
いしかできていず、それを預けていた文化学院ともども烏有
に帰してしまつたのであつた。それを哀惜して晶子は、

失ひし一萬枚の草稿の女となりて来りなげく夜

（寒窓集—婦人之友 大13・1）

と詠んでいる。

本稿では、与謝野晶子と『源氏物語』との関わりを堺時代、
新詩社時代に分けて論述し、晶子が『新訳源氏物語』を執筆
しようとした意図を考察し、その本文生成に依拠したテキス
トは何であったかを検証してみようと考えている。

一、堺時代の晶子と『源氏物語』

「与謝野晶子と源氏物語」を概観するために、まず晶子が
故郷の堺で『源氏物語』をどのような形で学んでいたかを見
ることにする。晶子の堺時代は、明治十一年（一八七八）
十二月七日の出生から明治三十四年（一九〇二）六月、上京
して与謝野鉄幹の許に身を寄せるまで、即ち、数え年で一歳

から二十四歳までということになる。

与謝野晶子（当時は鳳姓）は、大阪府堺区（現堺市）甲斐町四十六番屋敷に、父鳳宗七、母つねの三女として誕生した。異母姉二人に長兄がいた。家は駿河屋と称し、和菓子の老舗であった⁴。なおその後、弟妹が誕生した。

晶子と『源氏物語』との関わりは、彼女が堺市の宿院小学校を卒業し、同高等小学校に進み、さらに堺女学校（後の堺市立高女、現大阪府立泉陽高校）に入学した明治二十一年（二八八八）、十一歳頃と思われる。

紫式部は私の十一二歳の時からの恩師である。私は廿歳までの間に「源氏物語」を幾回通読したか知れぬ。それ程までに紫式部の文学は私を引き付けた。全くの独学であつたから、私は中に人を介せずに紫式部と唯二人相対して、この女流文豪の口づから「源氏物語」を授かつた気がしてゐる。

私は早く日本文学の何物たるかを解し得たのは之が為めであつた。また私の小娘時代の記憶力と直覚力とは之が為に敏捷にせられたので「源氏」を読んだあとで他の古文を読むのは少しも困難を感じなかつた。私が今日も「源氏」を隅隅に互つて諳んじてゐる外、各時代の代表的な文学書と史書とを細目にまで互つて記憶し、学生達にも話すことの出来るのは、初めに紫式部を精読したお蔭であつた。

（「読書、蟲干、蔵書」）

晶子は『源氏物語』を独学で読了したという。ちなみに、彼女が読んだ本は何であつたか、『湖月抄』という説⁶、寛文頃刊無刊記の絵入り「源氏物語」（晶子旧蔵小本）説⁷があるが、ともに推測の域を出ない。

晶子の独学による『源氏物語』を含む文学書の閲読は、厳しい環境の中でなされたようである。

私は遠慮せずに云ふ。明治時代の日本女子として生まれ、私は、自己を教育するのに男子に幾倍する勇氣と忍苦とを要した。私は八九歳から貪るやうにして古典と新書とを博渉して読んだ。そのために私は一般の娘達のやうな人並な娘時代を送らず、魅惑的な一切の物欲に背を向け、寧ろ其等の好奇と甘美な世界を見下ろして、教と怡楽とを書中の天才達と師友に求め、私の欲望と精力とを此の独学流の自己教育に集中した。この習慣は妻となり母となり、また教育者になつた今日も継続してゐる⁸。

晶子の学んだ堺女学校は、裁縫・家事中心の学校で、彼女の知識欲を満足させるものではなかつたが、それ以上の進学は許されなかつた。彼女は家業に身の入らぬ父に代わつて、十二歳の頃から家を切り廻していた。その多忙のうえに、両親は娘の読書癖を嫌がっていたので、店の仕事を済ませた後の、午後十時以後、一二時間が読書のためにとれるだけであつた。書物は祖母や父が昔読んだ古書の類い、東大在学中の兄が送ってくれる新刊の雑誌や小説類であつたといふ⁹。

「欲望と精力」を独学の自己教育に集中することが、彼女の生涯を通じての自己啓発の手段であつたわけであるが、その最も良き教材が『源氏物語』であると考へていたように思われる。先に引用した文章に続けて、次のように書く。

私には猶二つの特異性がある。私も自然を愛するけれども、私の程度の愛は誰も自然に対して持つ。私は自然よりも恐ろしく余計に人間を愛する。少女時代より時事と社会問題及び歴史に関心するのは此の性情に基づく。猶一つは詩歌の創作に實際寢食を忘れる程の情熱を傾けて今日に及んでゐることである。

右の二つの「特異性」、(一) 人間を熱愛すること、(二) 詩歌の創作に熱情を傾けること、が晶子をして『源氏物語』を二十歳までの間に、幾度も通読させた要因であつたと思われる。

本居宣長は『源氏物語玉の小櫛』の「くさくさのこゝろばへ」において、

ただ此物ぞ、こよなくて、殊に深く、よろづに心をいれて書る物にして、すべての文詞のめでたきことは、さらにもいはず、よにふる人のたゝずまひ、春夏秋冬をりくくの空のけしき、木草のありさまなどまで、すべて書ざまめでたき中にも、男女、その人々の、けはひ心はせを、おのくことく^{キケ}に書分て、ほめたるさまなども、皆其人くくの、けはひ心ばへにしたがひて、一やうなら

ず、よく分れて、うつゝの人のあひ見ることく、おしはからるゝなど、おほろけの筆の、かけても及ぶべきまにあらず、さて又よろづよりもめでたきことは、まづからぶみなどは、よにすぐれたりといふも、世の人の、事にあふれて思ふ心の有さまを書ることは、たゞ一わたりのみこそあれ、いとあらく浅きもの也、すべて人の心といふものは、からぶみに書ること、一かたにつきりなる物にはあらず、深く思ひしめたる事にあたりては、とやかくやと、くだくだしくめ、しく、みだれあひて、さだまりがたく、さまぐのくまおほかる物なるを、此物語には、さるくだくしくまくまで、のこるかたなく、いとくはしく、こまかに書あらはしたること、くもりなき鏡にうつして、むかひたらむがごとくにて、大かた人の情のあるやうを書るさまは、やまともろこし、いにしへ今ゆくさきにも、たぐふべきふみはあらじとぞおほゆる。

と説いている。宣長のいうように、人間の複雑な心理の變まで分け入つて描いたこの物語は、「人間を熱愛する」晶子にとつて、魅力あふれる書であつたろう。『源氏物語』は、晶子にとつて人間理解の師であつたといえるのではなからうか。詩歌の創作に熱情を傾けることは、『源氏物語』を愛読することと容易に結びつく。藤原俊成が「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」(『六百番歌合』の判詞)と喝破したように、中

世このかた和歌の創作における必読の書は『源氏物語』であった。歌語、修辭、技巧等を学ぶことや恋愛の文学的体験までさせてくれる和歌の正典が『源氏物語』であつたといえよう。晶子も和歌の創作のためにも『源氏物語』を読んでゐる。彼女が和歌に打ち込むようになったのは、何歳頃なのかわからないが、その動機については「歌の作り初め」という回想記に、

雑誌でお話いたしましたやうに後撰か拾遺かの集で女の歌のあまりに拙かつたこと新中納言と申す女房の歌の余りに悪いのに驚きまして、女はなか／＼勉めなければ男の中に交ることが出来ないと思ひまして、私が一つ力の限り勉めて見やうかと思ひましたのが、作り初めて御座います。(中略)それでもつてどれだけ出来るかと云ひますと月に二つか三つ位しか出来ないで御座います。然しながら自分は實際歌を造る天分があるかどうかとは常に考へて居りましたが、朝床あそとの中で目が覚めまして源氏の一卷一卷を歌につくつて見ますとそれが無論佳い歌では御座いませぬが一時間ほどに四十いくつ出来ました。少しの疲れもなしに苦もなしに詠めたものですからその時から私は勉めねばならぬと自覚いたしましたやうになりました、勉めて広く書を読まなければと存じますものですから、毎夜十二時まででは必らず書見をいたしました。¹¹⁾

と書いている。勅撰集等に見る女性歌人の作品の拙劣さに発憤して、歌を詠みはじめたがなかなかできない。その間、自己の天分の有無について悩み続けていた。しかし、ある時『源氏物語』の巻々を歌にしようとする、すらすらと幾つもできた。『源氏物語』を歌材として詠むことで、突然天分がめざめたというのである。その時、積極的に和歌の勉強をせねばならぬと思ひ、そのように努めるようになった。右の文章に續けて晶子は、

初めて雑誌へ歌を出して頂きましたのは、うき人を月にはさすが待れけむ伽羅きやらの香のこるおばしまあたり

と云ふので御座いました。これは醉茗せいめい様が直ほして下さつたので御座いますが自分は其時恋の歌を客観で詠まうとしたので御座いました。

と書く。この歌は、光源氏が朧月夜との再会を求めて、右大臣家の女の宮、女三の宮の居られるあたりをさまようところを詠んだものではなからうか。晶子が『源氏物語』の「花宴」巻に耽溺した結果生まれた歌のように思われる。

晶子は明治二十九年(一八九六)五月、旧派和歌の結社「堺敷島会」(本部堺市、会長渡辺春樹)に入会し、機関誌「堺敷島会歌集」(真鍋台鎮編集兼発行)の第三集(明治二九・五)に一首、

時鳥なく一声に雨はれてあやめつらしき三日月の影

といった古風な歌を載せている。『塚敷島会歌集』に晶子の名は、明治三十年（二八九七）四月の第十二集まで見えており、それらの歌は、鉄幹の高弟平野萬里のいう「源氏ぶり」（源氏物語情調とでもいふべきもので、源氏耽読の余勢もあつて知らず識らず平安盛期の人物となり、性別も問はずに詠んだやうな假作）のものが多し。

明治三十二年（二八九九）二月、晶子は関西青年文学会堺支会に入会、機関誌『よしあし草』に、まず和歌ではなく、島崎藤村ばりの新体詩を鳳小舟の名で発表し、やや遅れて和歌を投じている。この無名の若人の文学結社は鉄幹の指導の許、新派和歌を標榜していたが、会員達の歌は、全体的に旧派の色濃いもので、晶子も例外ではなかった。しかし、明治三十三年（一九〇〇）五月、鉄幹主宰の東京新詩社の機関誌『明星』に歌六首を発表して、入社してから俄然新派和歌風となる。新詩社入社以後、明治三十三年八月に文学講演会のため来阪した鉄幹に会い、十一月には鉄幹、山川登美子と共に京都の永観堂の紅葉を賞で、栗田山の宿に一泊して、鉄幹と恋愛関係になった晶子は、明治三十四年（一九〇一）六月上京し、八月、新詩社より歌集『みだれ髪』を鳳晶子の名で刊行する。ここに見える歌の数々は、鉄幹との恋愛体験を大胆奔放に歌いあげたもので、旧派和歌の詠風は払拭されている。この「明治歌壇始まって以来一世を風靡した画期的な歌集」が誕生した背景には、『源氏物語』を正典として和歌を学んできた晶

子の研鑽の日々が存在しているといえよう。

二、新詩社における与謝野晶子と『源氏物語』 (一) 新詩社「小集」における『源氏物語』の講読

既に触れたように、晶子は明治三十四年六月、かねて恋愛関係にあつた鉄幹の許へ身を寄せ、八月、歌集『みだれ髪』を刊行、若い文学青年達には、大胆に自我の解放を叫ぶ歌集として、熱狂的に迎えられ、晶子は一躍、新詩社の女王としての地位を獲得した。秋、鉄幹と結婚、明治三十五年（一九〇二）十一月には、長男光が誕生した。

さて、新詩社では、晶子が上京寄留した三十四年六月頃から、茶話会と名づけた一種の研究会を月一回開いており、この年度は七・八・九月に『伊勢物語』の講読がなされていて、その七月の茶話会の模様が、『伊勢物語評語』(一)として、三十四年八月の『明星』(第拾四号)に掲載されている。三十七年（一九〇四）五月からの『源氏物語』講読のようすを知るよすがとなるので、その一部を引用してみる。

そのおりの出席者は、落合直文・前田林外・鳳晶子・宇治の山人・栗島狭衣・鉄幹である。現行の『伊勢物語』では、初段より九段に当る章段を、右の六人で読んでいる。四段の「ほいにはあらで、心ざしふか、りける人」や「月やあらぬ春や昔の春ならぬ……」の歌を談じる部分をとりあげる。

(直) ほいにはあらで―何も男はその人を目ざして居た

のではない。つまり何かの出来ついでに起つた……この處には無論多少の時間があります。

(林) 言ひかへれば『行掛り上』と云ふ意でせう。

(鉄) 私はこれは大に議論のある事であらうが、例の業平の政略上から来たので、この『ほい』は、初めは恋が本意ではなかつたと云ふ意に解したい。

(晶) 行きとぶらぶ人は志が深かつたのですけれど、女は心ゆかぬさまであつた。そのほいでは御座んすまいか。(直) こゝで見ると、決して策略的とは見られない。

(中略)

(鉄) 『月やあらぬ』の歌は、短詩形の中に複雑な内容を包んだ作で、この以前には例の少い歌かと思ふ。それから一三三の句の修辭が余り巧み過ぎるので、却て真情をこめた作ではないやうな感がする。

(晶) 私、至情の歌かと思ひます。四五の句がござりますために、一三三の句も巧み過ぎたとは思はれませぬ。

(鉄) 内容の複雑なものと修辭の細かいのが、この歌の賞め所であらう。それにしても一三三の句は巧み過ぎる。勿論好い歌にはちがひ無い。

(晶) この一段は伊勢のなかで、叙情の文として最も優れた所と思ひます。

長々と引用したが、「ほいにはあらで」を鉄幹は、「恋が本意ではなかつた」「業平の政略上から来たので」と説く、それ

に直文は「決して策略的とは見られない」と学者らしい穩健な考えを述べる。晶子は鋭い感性でとらえた発言をする。そんな質の高い講演会であつたやうだ。

この「茶話会」は、明治三十五年五月から再会され、新詩社(鉄幹自宅)や平出修宅が会場となり、右に見たように、古典の講演や短歌の合評、歌会がおこなわれた。参加者は三十四年の例から見て、前田林外・平木白星・高村碎雨・平出露花(修)・前田翠溪・晶子・平塚紫袖・茅野蕭々・平野萬里らで、時おり森鷗外・上田敏・蒲原有明・薄田泣菫・馬場孤蝶といった大家連も参加したようである。この茶話会は、この年から「小集」とよんでいる。小集に『源氏物語』が登場するのは、明治三十七年五月からで、『明星』(辰歳第五号)の「社告」に、「五月小集は八日の午前九時より候。源氏物語の初巻御持参の事」とある。「初巻」は六、七月も読まれ、八月「空蟬」巻、九月「若紫」と読まれている。講演の内容は『明星』誌上に報告されていないので不明だが、先の『伊勢物語評語』のようなやりとりがなされたのであろう。明治三十八年度(一九〇五)には、二月に「末摘花」巻、三月は小集が二回あって、「紅葉賀」巻と「花宴」巻、四月は同じ「花宴」巻、五月は「葵」巻、六、七月も同じである。明治三十九年(一九〇六)、四十年(一九〇七)、四十一年(一九〇八)は、小集における『源氏物語』講演の記事は、見られない。

この新詩社小集の『源氏物語』講演を通して、晶子の『源

氏」の読みは、深まっていたことであろう。光源氏が織りなすさまざまな恋愛の背後に横たわる人間心理の複雑さを、的確に読みとる術を、学識に富む、生活経験の豊かな参加者から教えられたと思うのである。特に弁護士で、新社社第一の評論家であった平出露花などはよき指導者であったろう。

(二)「閩秀文学会」と「文学講演会」の講師としての 与謝野晶子

明治四十年、この年晶子は数え年三十歳、四人の子女の母であり、共著を含めて七冊の詩歌集の著者であつて、歌人としても、家庭人としても満足すべき状態にあつた。

六月、晶子は「時勢の必要に応じ、平易簡明に内外の文芸を講述して、一般女子に文学上の知識趣味を修めしめ、兼ねて女流文学者を養成する」ことを目的として、成美女学校内に設けられた閩秀文学会の講師となり、生田長江(アストン)日本文学史を担当、馬場孤蝶(大陸文学・新体詩法を担当、森田白楊(英文学史を担当)に伍して、『源氏物語』・『大鏡』・『新古今集』・『作歌法附和歌添作』を担当している。八月には会の組織を「文科大学の制度に據り」として変革し、新しい科目(西詩研究・詩学・美学・独逸文学・美術史・神話学・万葉集・元禄文学)を設け、講師(川下江村・和田英作・平田禿木・戸川秋骨等)を増やしている。また、新組織による講義は、「閩秀文学会講義録」として、「投稿して聴講し難き婦女子諸君

の爲め」金尾文淵堂から刊行する旨の広告も出ている。これらの講師は、大学において専門教育を受けた文学士や著名な芸術家である。その中であつて、古典や和歌の作歌法を講じ添削を担当するなど重要視されているのは、晶子の歌人としての才能や業績、古典、特に『源氏物語』の造詣の深さを馬場・森田・生田といった新進気鋭の文学者たちが認めていた結果といえよう。また、この会が養成しようとする女流文学者のモデルとして、晶子を厚遇していたとも考えられる。この会での晶子の講義ぶりを山川菊栄は、

晶子夫人は『源氏物語』をしましたが、これがあの大胆な歌をよむ人かと驚いたほどなよなよとして、関西なまりで消え入りそうな声でいながら、話の内容たるや自信満々。萩野由之博士をはじめ当代一流の大家連を舌のさきでなで斬りにし、日本で源氏のわかるのは私ひとりといわぬばかりの口ぶりでした。¹⁸⁾

と追想している。山川は後に「近代日本の生んだ明敏な女性思想家・理論家の第一人者」¹⁹⁾となり、もう一人の受講者の平塚雷鳥も『青鞥』(明治四四・九・大正五・二)を創刊して、女性解放・婦人参政運動に尽力した。強弁するならば、この会の目的とした「婦女子の好尚知識を高め、傍ら女流作家を養成する」を二人の婦人先覚者が達成したともいえよう。この会の終了時期は、はっきりしない。明治四十年九月一日号の『文庫』²⁰⁾「六号活字」欄に、閩秀文学会の生徒は二十名にすぎ

ず、教師の方が多くとあり、同誌九月十五日号の同欄では、同会が「愈々つぶれる、廢校解散の日、女子星董党万歳を三呼するだらう……」とあるところから、九月末頃には会は消滅したと思われる。

明治四十一年十一月『明星』は廢刊となった。通刊百号であった。明治四十二年（一九〇九）一月、森鷗外を顧問、上田敏を指導者、平出露花を出資者として『スバル』が創刊された。与謝野寛（明治三八年五月頃、鉄幹の号を廢す）晶子夫妻は単なる客員格であった。両人は大きな脱落魄を持っていったと思われる。この感情と貧窮をおぎなうべく計画されたのが、「文学講演会」であった。

文学講演会の目的は、「短歌及び新体詩を製作し若くは研究せむとする特志の人々の為め」の講演会とし、週二回（後には一回）で、寛が「歴代古歌講義」（古事記・日本紀・万葉集・神楽催馬楽・伊勢物語・業平集・貫之集・小町集・和泉式部集の歌）、晶子が「源氏物語大意講義」、「大鏡抄読講義」で共に書物持参、寛との共同で「新派和歌講義」、「短歌及新体詩製作談」、「会員の短歌添削」をするとし、明治四十二年四月より開講、満一年で終了としている。以後、十月、十一月に講義科目、時間の変更があり、晶子担当に限って記すと、十月からは「源氏物語講演」のみとなり、十一月の『スバル』誌上の広告には、「本月より蓬生の巻に入る書籍持参」とある。このような記述から、晶子はテキストを使いながら講義して

いったと思われる。「講演」といい、「講義」といって混合して使われているが、実質的には、講義が相応しいと考えている。与謝野光（寛と晶子の長男）がこの講義を回想して、次のように書く。

自宅での毎週二回文学講習会を開く事にして父は和歌について、母は源氏物語の講義を初めた。二階の八畳の間に毎回集まる聴講者は二十名内外であった。その中に水上瀧太郎、堀口大学両氏もあつたと謂ふことである。

この「文学講演会」は、晶子の育児（五人の子女）と六人目の懐妊、執筆活動の多忙さと受講者の減少によつて、自然消滅的に明治四十三年（一九一〇）五月頃に終了した模様である。闊秀文学会、文学講演会は講義であった。ここでは『源氏物語』の巻々について、その梗概や問題点を如何にわかり易く聴者に伝えるかが肝要であった。晶子はこれらの機会を通じて、その修練を自己に課していった。そこで獲得したものが、これから始まる『源氏物語』現代語訳の原動力になったと考える。

三、与謝野晶子『新訳源氏物語』の成立

（一）『新訳源氏物語』起稿に至るまでの経緯

『新訳源氏物語』の前に「幻の源氏物語講義」と呼ばれる『源氏物語』現代語訳の存在したことを「はじめに」の部分で言及したので、これについては詳しくは述べない。この「講義」

(以下、「幻の源氏物語講義」をこう表記する)は、小林天眠の手許に「薄雲」巻の前半に当る部分の晶子原稿が一枚残っているが、その形が推測できる。それは原文に忠実な訳文ではない。原文を十分に咀嚼した上で、しかし、原文からあまり離れないようにして、現代の読者にわかるように翻訳したもので、寛は「逐字的講義」と呼んでいる。文体は厳密には文語文体に近い。『新訳』(『新訳源氏物語』を以下こう表記する)は、言文一致体である。この相違について、河添房江は「それは作者のカノン、読者的カノンのどちらかに力点をおいて『源氏物語』を押し出すのか、その立場の相違をものがたっているように思われる。つまり、「講義」において当初、作者のカノンとしての『源氏物語』に力点が置かれたのに対し、『新訳』ではより広く読者的カノンとして、『源氏物語』を押し出すようとしているのである」と。河添は作者のカノンを「散文や詩歌を書くためのモデルを与えるテキスト」とし、読者的カノンを「道徳的、宗教的、社会的ないし政治的な教育を主な目的として生まれたテキスト」と説明している。「講義」は河添のいうように作者のカノン、和歌を詠み、古典を愛好する人々対象に書かれたものであったといえよう。

「講義」を起筆してから、一年か一年半後、金尾文淵堂が『新訳』の仕事を持ち込んできた。文淵堂主人金尾種次郎の回想によると、内田魯庵を訪問して出版上の話を聞いているうちに、「君の方で与謝野晶子さんに源氏を訳して貰って出した

ら何うだ吃度立派なものが出来ると思ふ。全く適任だよ」と教えてくれたのが『新訳』の出版動機であったという。金尾は直ぐそのまま、晶子の許へ行き、魯庵からこのような話を聞いた。是非やってほしいと頼むと、晶子は内田先生がおっしゃるならと承諾したという。内田魯庵は文淵堂の編集ブレーン的な存在で、金尾は日頃から尊敬し、何かと相談に乗ってもらっていた。ここで不審なのは、晶子が小林天眠依頼の「講義」を引き受けながら、また『新訳』の仕事もあっさり承諾したことである。その理由として考えられることは、

一、文人としての先輩であり、尊敬する内田魯庵の推薦であつたから創作意欲が湧いた。

一、経済的理由。夫寛を『明星』廃刊後の失意の生活から立ち直らせるべく外遊させようとして、その旅費を工面するのに苦慮していたが、その旅費捻出の一方法であると考えた。

一、大阪以来の知己で、出版以外の生活上の相談もし、今後の外遊費についても金策の相談をかけた金尾文淵堂の依頼であつたから、断り切れなかつた。

一、この時期の晶子は、散文創作の意欲が旺盛で、言文一致体の自然主義風な小説を多作しており、『源氏物語』を平易な口語文体の小説にし、「読者的カノン」として世に出そうと考えた。

『新訳』執筆にかかったのは、明治四十四年(一九一一年)一月

からというから、明治四十二年（一九〇九）九月以後のいつか執筆を開始した「講義」と、しばらくは、併行して書いていたのであろうが、その後は一気呵成に書き上げたものと思われる。「新訳」の執筆態度を顧みて、「細心に、また大胆に努めた。必ずしも原著者の表現法を襲はず、必ずしも逐語訳の法に由らず、原著の精神を我物として訳者の自由訳を取えたのである。」（「新訳源氏の後に」）としている。そして、驚くべき大胆さとも言うべき宣言をする。

自分が源氏物語に対する在来の注釈本の総てに敬意を有つて居ないのは云ふまでもない。中には湖月抄の如きは寧ろ原著を誤る杜撰の書だと思つて居る。³¹

また、いう、

一体源氏物語の在来の注釈書と云ふものが何れだけ読者を誤つてゐるか知れない。今日活版本に成つてゐる湖月抄には他書の注釈まで網羅してあるが、どの注釈も八分までは間違つてゐるのである。昔の学者に充分に源氏物語の読めた人は無かつたのであらう。本居宣長翁でさへ『玉の小櫛』に書かれた零碎なる解説が二分通り間違つてゐる。（中略）自分は近年誰に向つても有害な注釈本を避けて無註の源氏物語を勧めてゐる。³²

と、在来の諸注釈本、特に『湖月抄』に対しては、その注釈の信頼すべからざるを厳しく断ずる。三谷邦明によれば、明治期の一番読まれた『源氏』本文は、『湖月抄』であつたと

いい、猪熊夏樹が増訂して、明治二十三年（一八九〇）に出版した『訂正増註原註源氏物語湖月抄』は、この本文が明治期の（読み）を規定したといつてよいという。³³ その『湖月抄』を、かくも辛辣に批判するのは、晶子がこの書をよく読んでいるともいえるが、「湖月抄の如きは寧ろ原著を誤る杜撰の書」とまでいって、それとできるだけ距離をおこうとする態度から、『新訳』を生み出すのには、『湖月抄』をほとんど見なかつたとする方が妥当なのではと考えて、本稿での言及はできるだけ避けている。

（二）「新訳源氏物語」の本文生成に依拠したテキストは何であつたか

Ⅰ、『日本文学全書』所収『源氏物語』と『国文大観』所収『源氏物語』の比較検討による『新訳源氏物語』本文の推定

結論からいえば、私は「新訳」の本文生成に依拠したテキストは、『日本文学全書』第八編から第十二編に収める『源氏物語』（以下同書を博文館本と称す）であつたと考える。この問題の先行研究には、神野藤昭夫の「与謝野晶子の読んだ『源氏物語』」がある。神野藤は「たんなる底本探しではなく、どのようなテキストに親むことが、晶子の『源氏物語』訳を生み出すような体験に繋がつたのか。そういう観点から、この問題を考えてみる必要がある」とし、晶子が親しんだ本は、

明治四十一年四月一日発行の『女子文壇』（四年第五号）掲載の「手の上の氷（源氏物語談話の一節）」に見える『日本文学全書』所収の『源氏物語』であつたらうと結論づけている。

しかし、これが『新訳』の口語訳に使われたテキストとなつたことまでは断定していない。「博文館本は」落合直文・小中村義象・萩野由之の三人の校になり、頭註が付されているものの、現代の感覚からいえば、簡略である。本文と向き合つて読むにはいかにもふさわしいから、ある時から晶子の好んで読むテキストとなつたことは想定しておいてよいだらう」に止まっている。

まず、「手の上の氷（源氏物語談話の一節）」に引用の『源氏物語』本文について検討し、これが博文館本かどうかを確定することにす。

今日読んで頂きますのは、蜻蛉の巻の、博文館本の三十五枚目からで御座います。板倉屋本では二十三枚目になって居ります。皆様の御評も十分承らうと存じましたのですが、今日は少人数で御座いますから、まあ私からお話いたす事にいたします。（以下は略し、引用本文を記す。上の番号は、便宜的に附したものである。）

(1)、^①人知れぬすぢはかけても見せ給はず、蓮の花の盛に御八講せらる。六条院の御ため、紫の上など、皆思しわけつ、御経佛など、^②供養せさせ給ひて、^③厳めしく、^④尊くなんありける。

人知れぬすぢは無論浮舟の死のことで御座いませう。御八講の場所は六条院です。

(2)、^④五かんの日などは、いみじき見物なりければ、こなたかなた女房につきて参りて物見の人多かりけり。五日と云ふ朝座にはてて、御堂の節^⑤とりさげ、御しつらひあらたむるに、北の廂も、障子ども放ちたりしかば、皆入りたちて^⑥つくらふ程、西の渡殿に姫宮のおはしけり。この文章は、閩秀文学会の某日の講義風景であると思われる。というのは、先に引用した山川菊栄の文章の、文学会での晶子の講義ぶりを叙した続きに、

さて『源氏』全編を通じて私の好きな所とはなはだ印象的なりあげ方で、「かげろふ」の巻の、夏の日ざかりに、薫大将が物かけからかいまみているとも知らず、薄もののひとえを着て匂いこぼれるような明石の姫君が、氷のかけらを手のひらにのせて、侍女たちとうちとけてたわむれている場面を話しました。

とある。とすると、「手の上の氷」は、山川菊栄の聴講したおりの講義の様子を実際に近い形で書きあげたことになる。右の文中の晶子が話したとする部分は、「氷を物の蓋に置きでわるとて、もてさわぐ人々大人三人ばかり童と居たり。唐衣も汗衫も着す皆うちとけたれば、御前とは見給はぬに、白き羅の御衣着給へる人の、手に氷を持ちながら、かく争ふを少しゑみ給へるおん顔、いはん方なく美しくしげなり」で、「手

の上の氷」の中にも引用されている。

冒頭のもう一本の板倉屋本とは、『国文大観』物語部一、二の、『源氏物語』上、下で、本居豊穎、木村正辭、小杉楳邨、井上頼因、落合直文監修。編者丸岡桂、松下大三郎。板倉屋書房から明治三十六年（一九〇三）一月に一部、同年三月に二部が発行されたもの。原文のみで頭註は一切無い。ちなみに、この本は物語部一、二が、板倉屋版そのまままで、明治三十九年一月に、明文社から再版されている（以下、同書を板倉屋本と称す）。

以下、先に示した「手の上の氷」に載る『源氏物語』本文（1）、（2）と博文館本の同部分（3）と（4）、また、板倉屋本の同部分（5）と（6）とを比較検討してゆく。初めに、両本の本文を示しておこう。

博文館本

（3）、①人しれぬすぢはかけても見せ給はず、^{はちす}蓮の花の盛に、御八講せらる。六条院の御ため、紫の上など、皆思しわけつ、御経仏など②供養せさせ給ひて、^{いがめ}厳しく③尊くなんなりける。

（4）、④五かんの日などは、いみじき見物なりければ、こなたかなた女房につきて参りて物見る人多かりけり。五日といふ朝座^{あさざ}にはて、御堂^{みだう}の飾^{かざり}⑤とりさけ、御しつらひあらたむるに、北の廂も、障子ども放ちたりしかば、皆入りたちて⑥つくるふ程、西の渡殿に姫宮^{ひめのみや}おはしまし

けり。

板倉屋本

（5）、①人志れぬすぢはかけても見せ給はずはちすの花の盛に御八講せらる。六条院の御ため紫の上など皆おぼしわけつ、御経仏など②供養せさせ給ひていかめしく③尊くなむなりける。

（6）、④五卷の日などはいみじき見物なりければ、こなたかなた女房につきて参りて物見る人多かりけり。五日といふあさ座にはて、御堂の飾^{かざり}⑤とりさけ御志つらひあらたむるに、北の廂もさうじども放ちたりしかば皆入りたちて⑥つくるふ程、西の渡殿に姫宮^{ひめのみや}おはしましけり。

右に示した本文のうち、まず「手の上の氷」と同様に、番号と傍線を附した語句の表記を比較してみる。

（氷）①人知れぬ ②供養せさせ給ひて ③尊くなんありける ④五かんの日 ⑤とりさけ ⑥つくらふ ⑦おはしけり

（博）①人しれぬ ②供養せさせ給ひて ③尊くなんなりける ④五かんの日 ⑤とりさけ ⑥つくらふ ⑦おはしましけり

（板）①人志れぬ ②供養せさせ給ひて ③尊くなむなりける ④五卷の日 ⑤とりさけ ⑥つくるふ ⑦おはしましけり

（水）は総ルビになっている。晶子によって付けられたと

思えるので、対象としない。語句表記の同一性を、(水)と(博)、(板)と比較したとき、(博)、(板)ともに低い。ここでは、④五かんの日に注目する。「蜻蛉」巻におけるキーワードの一つであるこの語の表記が、(水)と(博)とが同じということ、両者の近い関係を示していると考える。

続いて、句読点と漢字使用の比較を行おう。

句読点の比較を示すと次の通りである。

- (博)の句読点数18、(水)で同じ箇所にある句読点数17
- (板)の句読点数7、(水)で同じ箇所にある句読点数7

また漢字使用の比較は次の通りである。

- (博)の漢字数57、(水)で同じ箇所にある漢字数56
- (板)の漢字数52、(水)で同じ箇所にある漢字数50

句読点や漢字の使用に関しては、句読点の置き方と多さ、漢字化の同一性と多さから、(水)は(博)に近い。というよりは、(水)は(博)に拠るといえると考ええる。(板)は右の観点から、(水)とは遠い関係といえよう。

さらに一つ、引用した二つの文章、(水)では(1)・(2)に続いて、「物き、こうじて、女房もおのおの局にありつつ、御前はいと人づくななる夕暮に、大将殿直衣着かへて、今日まかんづる僧の中に、必らずの給ふべき事あるにより釣殿の方におはしたるに皆まかんでぬれば、池の方にすすみ給ひて、人づくななるに、かく云ふ宰相の君など假初に几帳などばかり隔ててうちやすむ上局したり……」があるが、ここの「假

初に」の表記は、(博)と同じである。(板)では「かりそめに」である。ちなみに、『湖月抄』、『大成』も「かりそめに」である。他の本に見られない表記を採っていることは、(水)と(博)の近さを示している証拠であろう。

以上、晶子の「手の上の水」に引用した『源氏物語』「蜻蛉」巻は、博文館本であるとしてよいと思う。この本は、閨秀文学会の晶子の『源氏物語』講義だけでなく、自宅での文学講演会の講義のテキストでもあったと考ええる。また、明治四十二年(一九〇九)九月十八日付の小林天眠宛晶子書簡によれば、天眠依頼の『源氏物語』現代語訳(所謂、幻の源氏物語講義)に対する晶子の計画は、博文館本を底本に、その注釈に幾倍せるものをつけようというものであったようだ。明治四十四年一月には、博文館本をもって『新訳』を起稿した。私はこの本に拠って、『新訳』の本文を生成したと断定してよいと思っている。この確信を前提にして、その具体的な痕跡を『新訳』の中から探っていこうと考ええる。

II、『新訳源氏物語』に見る博文館本の痕跡

A、「蜻蛉」巻に見る痕跡

「手の上の水」引用の『源氏物語』本文は、博文館本の「蜻蛉」巻の数段を使用していたので、この巻から始めることにする。

①博文館本 — かの心知れるどちなん、いみじく物を思ひ給

へりしさまを思ひ出づるに（一頁、この頁数は巻ごとに振られたものである。）○頭註 — かの心知れるどちなんは右近侍従等をいふなり。

『新訳』 — 右近と侍従は浮舟の君が非常に煩悶して居たことを思ひ合せて、『鉄幹晶子全集』8 勉誠出版所取『新訳源氏物語』三二九頁。以下引用する『新訳』の頁数は、すべてこの書のもので、頁数のみ記す。）

「どちなん」を明快に、右近と侍従としたのは、頭註に拠ると思われる。ちなんに、「あの、事情を知っている二人の者は」（玉上琢彌訳註『源氏物語』第十卷「蜻蛉」角川ソフィア文庫 二〇〇三・五）の訳もある。

②博文館本 — なき御ためにはなか／＼めでたき御宿世見ゆべき事なれど、忍び給ひしことなれば、またもらさせ給はで、やませ給はなん、御志に侍るべき。（六頁）○頭註 — なか／＼めでたき御宿世見ゆべき事なれどは浮舟のために匂宮の自ら弔ひにおはせんは浮舟のためには面目あれど忍びしことのあらはれんはいかゞなり。

『新訳』 — 『姫様のためには、宮様にそれ程まで愛せられた人かと面目あることかも知れませんが、併しお亡れになった方が誰にも知らせずにお置きになったことは、やつぱりそつくり内証事にしてお上げになる方がお亡れになつた方へのお志になることですね。（三三四頁）

『新訳』の「面目ある」は頭註の語をそのまま使ったので

あろう。また、『新訳』の口語訳は、頭註を咀嚼して、わかり易く書いたものと考ええる。

③博文館本 — 御前なる人、誠に土などの心地ぞするを（四〇頁）○頭註 — 御前なる人誠に土などの心地ぞするとは女一人におされて御前にある人は「ちちくれ」などのことしと楊貴妃の故事なり。

『新訳』 — （誰であらうかと考へる迄もない、今上の女一の宮一品の内親王で渡らせられると直ぐ点頭かれた。）お傍の女は皆土塊のやうにしか見えなかつたが（三六〇頁）

原文の「土」を頭註は「ちちくれ」としたが、『新訳』はそれをそのまま使っている。

④博文館本 — 猶この御あたりは、いと異なりけるこそあやしけれ。明石の浦は心にくかりける所かななど、思ひ続くることゝもに、我宿世はいとやむごとなしかし。（五九頁）○頭註 — 明石の浦は心にくかりける所かなは明石の中宮の御さいはひおはすることをいふなり。

『新訳』 — （自分の母宮も尊貴な事に於てこの一品の宮に劣つた人ではない。唯だ后腹でないと云ふだけの事である。）それでも斯うして現れて見える処に段の違つた処のあるのが不思議である。自分の姉の中宮の幸の大きい事がそれでも解るなどと思つた。（三七四頁）

『新訳』の傍線部の訳文は、頭註の傍線部に従っていると

考える。特に二重傍線部「御さいはひ」は、そのまま『新訳』に使われている。

イ、「明石」巻に見る痕跡

① 博文館本 — 心ぼそうおぼせど、頭さし出づべくもあらぬ空のみだれに出で立ちまつる人なし。(「明石」二頁、以下頁数のみ記す。)

『新訳』 — 主人が心細く思つて居ることも知つて居ながら、戸の外へは顔も出せない天気であるから、京の様子を見に行くことも家来達には出来ないのである。(『鉄幹晶子全集』7、一三六頁。以下、頁数のみ記す。)

晶子は「出で立ちまつる」は、「出で立ち奉る」として、『新訳』のように「京の様子を見に行く」としたのであろう。他の活字本では、ここは「出で立ち参る」とし、源氏の許へ「お見舞いに参上する」(『全集』)と訳している。「出で立ちまつる」は、博文館本の誤植であろうが、それを晶子は忠実に訳そうとしたと考える。

② 博文館本 — 例の風出で来て(二〇頁) ○頭註 — 例の風は前にはそう吹きたりといふ順風なり。

『新訳』 — 涼しく細く吹く風に送られて(一四〇頁)
頭註「ほそう吹き」をそのまま使つて、「細く吹く」としたものと考える。

③ 博文館本 — 六十ばかりになりたれど、いと清げにあら

まほしう、行ひさらばひて(二三頁) ○頭註 — さらばひては瘦せて骨の立ちたるやうのことなり。

『新訳』 — 年は六十位になつて居る穢い年寄のやうではなく、瘦せて上品な坊様らしい人である。(二四一頁)

『新訳』の「瘦せて」は、頭註の語句をそのまま使つたのであろう。

④ 博文館本 — この常にゆかしがり給ふ物の音など更に聞かせ奉らざりつるを、いみじう恨み給ふ。さらば互にも、忍ぶばかりのひとことをだにとの給ひて、京よりもおはしたりし、琴の御こと取りにつかはして、心ことなる志らべをほのかに掻き鳴らし給へる、深き夜のすめるは譬へん方なし。(三四頁)

『新訳』 — 『私の聞きたいと思つて居た琴をあなたは一度も聞かせませんでしたね。』涙をそつと拭いて源氏の君はかう云つた。女は下を向いた俣で点頭またまいて居た。『私も弾くからあなたも聞かせて下さい。さうして思ひ出にしませう。』と云つて源氏の君は一絃琴をとりやつた。源氏の君の弾いた後で、女も悲しさに誘はれたやうに十三絃を弾き出した。(二四八頁)

博文館本の本文の「互かたみ」は、他の活字本には見られず、「形見」の字をあてている。晶子は原文通りに受け取り、『私も弾くからあなたも聞かせて下さい。』といった源氏の言葉を案出している。また、最後尾でも、原文では、京より持参の

琴の御琴を、源氏が弾くことになって、『新訳』では、源氏が弾いた後に、女も十三絃を弾き出すという風に、互いに琴を弾いて別離を惜しむ構成にしている。

ウ、「浮舟」巻に見る痕跡

①博文館本——怪しかりける身かな。誰も物の聞えあらば、いかに思さんと、まづかの上の御心を思ひ出で聞ゆれど、知らぬを、返す／＼いと心うし。(二二頁)○頭註——かの上は中の君のことなり。知らぬは浮舟の俗姓を知らぬなり。

『新訳』——それについても自分と云ふものは怪しい運命に弄ばれている人間であると云ふことが思はれる。此事が世間に知れた時、姉の女王はどう自分を思ふであらうかと云ふことが何よりも浮舟の君に苦しかった。『あなた』は一体誰の子なんだ。真実のほんとうことをお云ひよ。どんなつまらない人の子だつても私はいよいよあなたを愛するから。(二八三頁)

頭註は「知らぬ」を、「浮舟の俗姓を知らぬ」と解している。『新訳』はそれに拠つて、「あなたは一体誰の子なんだ。」と意訳したのではなからうか。

以上、例証は僅少ではあるが、晶子が日頃読みなれた博文館本の『源氏物語』を使って『新訳』を完成した痕跡とする。

晶子の『新訳』は原文に忠実ではない。そのために、『新訳』

中に博文館本の痕跡を見出すことは容易ではなかった。しかし、博文館本の本文や頭註と『新訳』とを丁寧に比較検討すると、その痕跡が散見することを発見した。右にとりあげたものは、確実にそれといえるものばかりである。頭註を大胆に意訳したものと思えるところが、いくつもあったのだが、印象批評としかいえない場合も多く省いた。『源氏物語』全巻を調査すれば、まだまだ見出せると考えている。

おわりに

『新訳』誕生の背景には、まず明治二十一年(一八八九)頃から始まる『源氏物語』との与謝野晶子の孤独な格闘があり、ついで、明治三十四年(一九〇一)六月からの新詩社時代には、夫寛や先輩知己の指導があったと考える。こうした研鑽を積んだ結果、晶子は『源氏物語』に絶対の自信を持つようになり、「講演会」などでは、『源氏』を講じるまでになった。其の頃、彼女が最も慣れ親しんだのは、博文館本であった。小林天眠が口語訳を依頼し、未完のまま関東大震災で灰燼に帰した所謂「幻の源氏物語講義」も『新訳』もこれがテキストであったと考える。晶子に『新訳』執筆を決意させたのは、寛の外遊費用や一家の経済逼迫もあるが、第一には内田魯庵の推薦による金尾文淵堂の依頼によると思われる。明治四十一年(一九〇八)一月より執筆にかかった『新訳』は前者が歌人や古典愛好家を対象とする「作者的正典」を意図し

たものであったのに対して、国民に広く愛読される「読者の正典^{カノン}」として押し出そうと考えたのだと思う。

博文館本の痕跡を、『新訳』の本文中に探し出し、その依拠したテキストは何であったかを結論づけたのであったが、もっと例証を博捜せねばならないと考えている。次いで『新訳源氏物語』のそれに及ぶことがこれからの課題である。

注

(1) 与謝野晶子「新訳源氏物語の後に」(『鉄幹晶子全集』8、勉誠出版、二〇〇二) 初出は大正二年(一九一三)十一月刊の下巻の一。

(2) 市川千尋「新訳源氏物語」解題(『鉄幹晶子全集』8、勉誠出版、二〇〇二)。

(3) 小林政治(号天眠)(一八七三〜一九五六)、明治三十年(二八九七)四月、浪華青年文学会(後、関西青年文学会)を高須梅溪・中村吉蔵らと結成、機関誌『よしあし草』(後、『関西文学』)を発行し、文学青年として出発、毛布卸商を営みながら、与謝野鉄幹・晶子の文学活動を支援し続けた。大正七年(一九一八)五月、株式会社天佑社を起し出版業に乗り出すも、大正十二年(一九二三)九月の関東大震災で倒産。大正八年(一九一九)十二月、大阪変圧器株式会社を設立、個人経営の毛布問屋も株式会社小林政治商店とし、大阪の実業家として名を知られるに至った。天眠の三女迪子は鉄幹・晶子の長男光と結婚、両家は姻戚関係にあった。

(4) 坂本政親「与謝野晶子年譜」を参照する。(『与謝野晶子・若

山牧水・窪田空穂』日本近代文学大系17、角川書店、一九七二)。

(5) 与謝野晶子「光る雲」中に収める。(『評論感想集六』、『定本与謝野晶子全集』第十九卷、講談社、一九八一)。

(6) 三谷邦明「明治期の源氏物語研究」特集「源氏物語―研究史と享受史」(『国文学』第四八巻一〇号、至文堂、一九八三)。

(7) 清水婦久子「第二節 源氏物語の絵入り版本」(『源氏物語版本の研究』、和泉書院、二〇〇三)。

(8) 与謝野晶子「内容見本―読者諸氏の前に、著者より」(新聞進一『与謝野晶子全集』新輯別巻「解説・年譜」所収、文泉堂出版、一九七六)。

(9) 『トキハギ』(常磐樹) 一号(新詩社、一九六七)。

(10) 大野晋編『本居宣長全集』第四卷(筑摩書房、一九六九)。

(11) 「名流婦人の處女時代」欄に出る。『女子文壇』四年第一号(女子文壇社、一九〇八)。

(12) 平野萬里「晶子秀歌選」(大東出版社、一九四四)。

(13) 明治三十二年(二八九九)二月、詩「春月」、五月、詩「わがをひ」、八月、歌二首、九月、歌二首を発表する。以下略。

(14) 『明星』第二号、鳳晶子「花がたみ」六首のうち三首を引用する。

ゆく春を山吹さける乳母が宿に絵筆かみつ、送るころかな
小松原なきてむれたつ雉子の尾を更にいろどる夕日かげかな
しろすみれ桜がさねか紅梅か何につ、みて君に送らむ

(15) 吉井勇「みだれ髪」解説(市民文庫「みだれ髪」河出書房、一九五二)。

- (16) 『明星』(未歳第六号、一九〇七・六)
- (17) 『明星』(未歳第八号、一九〇七・八)
- (18) 山川菊栄『女二代の記』(日本評論新社、一九五一・五)
- (19) 鈴木裕子『山川菊栄評論集』解説(岩波書店、二〇〇四・八)
- (20) 内外出版協会刊。
- (21) 『スバル』三号(昂発行所、一九〇九・三)
- (22) 『スバル』四号(昂発行所、一九〇九・四)
- (23) 与謝野光「母・晶子」(七)第三期『明星』三号、一九四七・三)
- (24) 大正四年(一九一五)五月十一日付、小林雄子宛晶子書簡と天眠註、植田安也子／逸見久美編、天眠文庫『与謝野寛晶子書簡集』(八木書店、一九八三・六)
- (25) 大正七年(一九一八)三月十六日付、小林政治宛与謝野寛晶子書簡。(24)と同じ書簡集。
- (26) 川添房江「現代語訳と近代文学―与謝野晶子と谷崎潤一郎の場合―」(講座源氏物語研究第十二卷、『源氏物語の現代語訳と翻訳』、伊井春樹監修、川添房江編集、おうふう、二〇〇八・六)
- (27) (26)と同じ。
- (28) 金尾種次郎「晶子夫人と源氏物語」(『読書と文獻』、日本古書通信社、一九四二・五)
- (29) 内田魯庵(一八六八―一九二九)は、評論家・翻訳家・小説及び随筆家。幅広い文化人であり、外国文学に培われた旺盛な批判精神に基づく風刺と社会性とヒューマニズムを特色とした。
『日本文学史辞典』、京都書房、一九八六・四)
- (30) (1)と同じ。
- (31) (1)と同じ。
- (32) 与謝野晶子「一隅より―雨の半日」(『評論感想集一』、『定本与謝野晶子全集』第十四卷、講談社、一九八〇・三)
- (33) (6)と同じ。
- (34) この書は初版本は明治二十三年十一月から明治二十四年二月にかけて、博文館より出版された。編輯兼発行人は大橋新太郎である。
- (35) 永井和子編『源氏物語へ源氏物語から―中古文学研究24の証言』(笠間書院、二〇〇七・九)所収。
- (36) (35)と同じ。
- (37) (18)と同じ。
- (38) (24)の『与謝野寛晶子書簡集』所収。

(みやもと・まさあき) 本学大学院博士後期課程)